

2020年8月9日
聖霊降臨後第10主日
東京聖三一教会

ヨナ 2:2-10
ローマ 9:1-5
マタイ 14:22-33

救いは、主にこそある

皆さんはサーカスがお好きでしょうか。サーカスがお好きだったらどんな妙技が好きでしょうか。魔術が好きの方も、動物の妙技が好きの方もいらっしゃるでしょう。子供たちはピエロのこっけいな妙技が好きでしょう。私はぶらんこに乗って空中回転をする芸が好きです。平素テレビで見えていたのですが、サーカスの公演で直接見てから大好きになりました。曲芸師が高い所から飛びおりて、空中で回転してあちらこちらに行き交う姿は本当に驚くべきものではないでしょうか。その姿は手に汗握るほどハラハラさせられますし、感嘆と拍手を呼び起こしたりします。それで私は、空中回転こそ「サーカスの花」であるという気がします。

ところである日、偶然にテレビで空中回転をする曲芸師がインタビューされる場面を見ました。彼女は世界サーカス大会で最高の賞を受けた人でした。司会者が彼女の能力を誉めると、彼女はこのように話しました。

「私に才能があったとしても、その才能をただ私が思うままにできるでしょうか。私にそのような技(わざ)を可能にさせるのは私を空中でつかまえてくれる人がいるからこそです。信じられる人がいて、彼にわたしの身を預けることができるから可能なのですね。」

時折わたしは、人生がサーカスのようであると思われることもあります。けれどもみなが妙技の才能を発揮しなければならないというわけではありません。舞台の後で助ける役割も大事なことであるからです。けれども一つ確かなことはあります。それは、私たちの人生の中には曲芸師のようにすべてを信じて自分を任せる方が必要であるということです。私たちの人生は成功する時もありますが、失敗と挫折の瞬間もあります。コロナ・パンデミックのただ中、今日の私たちのように先が真っ暗になっている時もあります。その時ごとにいつもわたしたちに手を差し伸べてくれる助けは切実なものです。ところで、今日の聖書日課は、神様が私たちに手を差し伸べていらっしゃるということを示してくれています。

まず、今日ご一緒に読んだ福音書に注目してみましょう。福音書はイエス様が弟子たちを強いて船に乗せて向こう岸に行かせる場面から始まります。その後、イエス様は山で祈っておられました。船に乗っていた弟子たちは途中で逆風に遭いました。弟子たちは湖の向こう岸に行くために夜通し必死になったでしょう。波風にもまれながら、もしかしたら船が壊れるかもしれないという恐怖をも感じたでしょう。

その時イエス様は、湖上を歩いて彼らに向かっていらっしゃいました。弟子たちはその姿を見て、恐怖のあまり「幽霊だ」と叫び声を出しました。夜中に湖上を歩いてくるものがあるので、そう考えるしかなかったでしょう。ところで、イエス様は怯えている弟子たちをこのように安心させました。

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」(マタイ 14:27)

イエス様の声に皆がどぎまぎしたでしょう。イエス様が癒しの奇跡を行われるのは見たが、湖上を歩けるなんて！その時ペトロはイエス様に、「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」(マタイ 14:28)と申しました。するとイエス様は「来なさい」とおっしゃいました。その言葉を頼りペトロは水の上を歩きはじめました。しかし、すぐ溺れてしまいました。

この物語には象徴的なメッセージがあります。まず、船は共同体を、湖は現実を意味します。イエス様が弟子たちに「向こう岸へ先に行かせた」というのは召命を与えてくださったということです。宣教的な課題であるとも言えま

す。しかし逆風に遭いました。困難にであつたのです。彼らは力を尽くして頑張つたのですが、目的地に向かって前に進めない、宣教的な課題を成し遂げることができない状況になったのです。いや、宣教の課題よりも、まず生存の問題がもっとも重要になりました。今日の私たちの現実と似ている面があるのではないのでしょうか。このような時はどうなすべきでしょうか。

ところで、ペトロは水の上を歩こうとしましたが、溺れかけてしまいました。挑戦、危機、失敗、挫折、不安の状況が続いています。なぜペトロは水に溺れかけたのでしょうか？ その理由が聖書にはこのように記されています。

「強い風に気がついて怖くなり…」(マタイ 14:30)

彼が水の上を歩こうとした時は、イエス様だけを眺めていました。その時は歩くことができました。しかし、ある瞬間から彼の注意力が散りました。イエス様を見たのではなく、強い風に気がついたので。それで溺れかけてしまったのです。イエス様はペトロを叱責するようにおっしゃいました。

「信仰の薄いものよ、なぜ疑つたのか」(マタイ 14:31)

イエス様はペトロの失敗の原因を「薄い信仰」と「疑い」のせいであるとおっしゃいました。しかし、このみ言葉はペトロだけのためのもではありません。ともにいた弟子たちのためのみ言葉であり、もしかしたら今日の私たちのためのみ言葉かもしれません。このみ言葉はわたしたちにも、「イエス様に頼る時、苦難を乗り越えることができる」ということを教えてくれるからです。イエス様だけを信じて頼れば、イエス様もわたしたちのそばにお近づきになります。ペトロが溺れかけた時のイエス様の姿に注目してください。イエス様はペトロに向かって手を伸ばして捕まえました。その時と同じ姿でイエス様は今の私たちにに向かって手を伸ばしていらっしゃいます。ですから、その手を捕まえればいいのです。

ところで、「手を伸ばして捕まえることがどんなことなのか」と気になる方もいらっしゃると思います。それは、冒頭申し上げたように、曲芸師が自分を捕まえるために手を伸ばしている人がいることを信じて、空中回転をすることと同じです。それは、神様に対する全くの信頼であり、自分を委ねて任せることでもあります。

私たちはそれを今日と一緒に読んだヨナ書を通して分かります。ヨナは海へほうりこまれて、魚の腹の中に呑み込まれてしまいました。これはヨナの人生の前途が真っ暗になった、死のような状況に置かれたということを意味します。その時、ヨナは祈りました。聖書には詳しく記されていませんが、わたしたちにとっては十分想像がつかます。それは、自分の人生を神様に委ねる祈りであつたでしょう。このようにいくら困難な状況に置かれても、祈りながら自分の人生を神様に委ねれば、生きることができます。魚の腹の中から出てきたヨナの告白にご注目ください。ヨナはこのように告白しました。

「救いは、主にこそある」(ヨナ 2:10)

このヨナの告白が私たち皆の告白になりますように願っております。

コロナ・パンデミックが続いている私たちの現実、一寸先も予想できないほど暗いものです。コロナ以降は世界的な経済恐慌が来るという予想もあるので、心はもっと重くなります。けれども考えてみると、人生はそもそも、イエス様の当時の弟子たちのように暗い夜でも船に乗って出発しなければならないものかもしれません。どこへ行くべきか、どんなことがどう起こるか分からないまま立ち去らなければならないことかもしれません。けれども信仰者にとっては希望があります。その希望は、洗礼を受けて信仰生活をする瞬間からわたしたちのものになりました。もちろん、わたしたちの人生も他の人のように人生の道で困難も経験するでしょうし、挫折も感じるでしょうし、恐怖も感じるでしょう。しかしイエスがわたしたちをこの世に派遣なさったから、イエス様が守ってくださいましょう。そしてその後には確かに恵みも与えて下さるでしょう。

今日と一緒に読んだローマ書にはこのように記されています。

「彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、礼拝、約束は彼らのものです。」(ローマ 9:4)

このみ言葉は、神様の子としての身分、栄光と救いの約束など、すべてのものが信仰を持っているわたしたちのためのものであるということを教えてください。この恵みは、わたしたちが神様の誠意を信じ、神様のみ手を捕まえる時に与えられるものです。このコロナの状況の中でも、神様のみ手は私たちに伸ばされています。私たちがその神様のみ手に答えて手を伸ばしたらよいのです。ですから、ゆるぎない心をもって神様に向かって手を伸ばし、人生を委ねてください。神様の約束は変わりません。

この一週、私たちに向かって手を差し伸べていらっしゃるイエス様を信じ、人生を委ね、安心して生きていくことができますように心よりお祈りいたします。